川端香男里先生の思い出

鈴木 晶

川端香男里先生には私の上にも下にも優秀なお弟子さんが大勢おられるので，私のような，ロシア文学研究者になりそこねた「脱落者」が先生の思い出を書くのは僭越の極みであるが，先生には大恩があるにもかかわらず，新聞雑誌などに追悼文を書く機会もなかったので，敢えてお引き受けしたしだいである。ただし私も老化がすすんで記憶が混濁しているので，間違いがあったらお許し願いたい。

最初に，先生の思い出を一言で要約してしまうと，先生の学識の深さは底知れず，まさに博覧強記だった。これは先生の謦咳に触れることのできたすべての教え子が同意してくれるにちがいない。一度，助手や大学院生たちに，ご自宅の書庫を見せて下さったことがある。それは図書館といってもおかしくない，驚くほど巨大な書庫だった。私たちは驚嘆し，あちこちで「わあ，あの本がある」「これもある」という叫び声があがったことを覚えている。寛大な先生は，こちらの借りたい本をなんでも貸して下さった。

また，私は怒った先生を一度も見たことがない。声を荒げて学生を叱る場面に遭遇したこともない。不愉快なことやショッキングなことがあっても，せいぜい苦虫をかみつぶしたような顔をなさるだけで，激しい感情を表に出すことはなかった。少なくとも私はそういう先生を見たことがない。

その一方で，陰で人の悪口を言うことは多々あった。たとえば私のような学生相手に，他の学者の仕事をこきおろすことはしばしばあった。そういうときは，すさまじい毒舌家に変身するのだった。

同僚の先生や助手の方に，出来の悪い学生のことをぼやいたりすることも珍しくなかったようだ。だから私のような不出来な学生のことをずいぶん嘆いておられたということは，後になって人づてに聞いた。歴代の助手の方々は，先生からずいぶん愚痴を聞かされたのではなかろうか。

以下は本当に個人的な思い出である。

私が大学に入学したのは 1971 年のことで，当時，このスラヴ語スラヴ文学科の前身である露語露文学科はまだなかった。高校時代はとくにロシア文学に興味はなかったので，川端先生のお名前を知ったのは大学に入ってから，それも 2 年生になってからのことで，当時，雑誌「ユリイカ」に連載されていた「薔薇と十字架」によってである。一般読者にとっては，この連載によって先生は彗星の如くデビューしたのだった。その頃は世紀末文

学・象徴主義・神秘主義が人気を博していて，フランスの澁澤龍彦，ドイツの種村季弘，イギリスの由良君美，そしてロシアの川端香男里が，「外国文学青年」たちのヒーローだった（私は澁澤さんだけはじかにお目にかかることができなかったが，幸運にも他の 3 先生からは何らかの形で指導を受けることができた）。

その「薔薇と十字架」を連載しているとき，先生はまだ 40 歳だった。自分が 40 歳だった頃のことを振り返ると，穴に入りたくなる。

さて，現在のことは知らないが，かつては毎年秋学期に，本郷の各文学科の教授が駒場で××文学史を講義していた。「薔薇の十字架」の筆者がどんな顔をしているのか見てみたくて，級友といっしょにその講義に出てみた。講義の後，その級友と「全然イメージが違ったな」と言いながら笑い合ったことを覚えている。「世紀末」「象徴主義」「神秘主義」といった言葉から，おしゃれな服を着て，顔に憂いを湛えたダンディーな教授を想像していたのだが，あらわれたのは，独特の笑みを浮かべた，ぽっちゃりした，健康的で，人の良さそうな教授だったからである。

ぽっちゃりしたと書いたが，川端先生はともすると肥る体質だったらしく，体重がある限度を超えるたびにダイエットに励んでいたので，無礼な表現で恐縮だが，定期的に膨張と収縮を繰り返していた。あるとき，なにか先生に用事があり（どんな用事だったかは忘れた），早朝，先生の研究室を訪ねたことがある。そのとき先生は，ご自分で育てたアルファルファをわかめスープに浸したものを召し上がっていて，「朝食はそれだけですか？」という私の問いに，「ダイエット中なのだ。わかめスープは塩分が多いから，アルファルファだけをすくって食べ，スープは捨てる」というお答えであった。ちなみに先生はご自宅の裏庭で各種ハーブを栽培されていた。

私は入学して最初の試験，つまり一学年前期の試験を受けず，早々と留年を決めた。駒場で 3 年目の秋になっても，もう一年留年するつもりでいたのだが（典型的なモラトリアム状態），担任の佐藤純一先生から「木村彰一先生があと一年で退官されるから，何が何でも本郷に進学しなさい」と強く薦められてはじめて本郷に進学することにした。じかに川端先生の指導を受けることになったのは，それからである。とはいっても，私は授業というものにほとんど出席しなかったので，正直なところ，先生の授業に関する記憶は乏しい。

人は概して自分に都合の良いことは覚えていて，悪いことは忘れてしまう，あるいは記憶を都合良く改変してしまう傾向があるが，その典型例になりそうな，あるエピソードを今でも覚えている。ある年度，川端先生の演習で，ロシアの詩を読んだ。チュッチェフの詩集だったかもしれない。私の分担箇所に，ギリシアの詩を下敷きにした作品があったので，ロエブ古典叢書を調べていったら，先生から「ロシア詩の授業でロエブとは，さすが鈴木くんだ」と褒められた。

先生にご迷惑をおかけしたことは多々あるが，いちばんのご迷惑は以下の話。大学院時

代，私は仏文の菅野昭正先生のマラルメ講読の演習に参加していた。もともとロシア文学研究者になるつもりはなかったので，菅野先生に「仏文に移籍したいのだが」と相談に行ったところ，「仏文にはオーバードクターがごろごろいるから，来ても苦労する。ちゃんとロシア文学を続けなさい。そういう不届きなことを考えないよう，もっとちゃんと監督するよう，川端くんを叱っておく」と一蹴された。実際，その後，菅野先生は川端先生を叱ったらしく，川端先生が「鈴木のやつが菅野先生にこんな相談をしたそうだ。大恥をかいたよ」と助手にこぼしていたことを，助手の方から聞いた（そのときの助手がどなただったか，忘れてしまった）。だいたい，先生はものすごい照れ屋で，なんでも当の本人には言わず，他の人にこぼすのだった。私と会っても，一言もそのことに触れなかった。

先生に救われたことも多々ある。その代表例はといえば，上のエピソードと関係があるが，修士の 3 年目に（私は学部に 6 年いた後，修士課程も 2 年では修了できなかった），もうロシア文学をやめて，翻訳家として身を立てようと思い，先生に相談に行った。すると先生は，「いまやめたら最終学歴は学部卒になってしまう。どんなものでも提出すれば修士号をやるから，とにかく出せ」と言われた。時はすでに秋だったのだが，2 ヶ月家に籠もって修論をでっち上げ，お情けで修士号を頂いた。

それには後日談がある。修士を提出した後，先生から「どうせすぐには食っていけないだろう。博士に進学すれば奨学金がもらえるぞ」と唆され，そのままずるずると博士に進学してしまった。博士課程の奨学金（育英会）は月 7 万で，当時の貧乏大学院生にとっては大金だった。

博士入試の際，語学の試験でフランス語を選択したら，問題文が全然わからない。面接の際，出題者の森安達也先生から「きみはフランス語ができると聞いていたが，全然できないじゃないか」と詰問され，私はぐうの音も出なかった。後で川端先生が「こんな文章じゃ，鈴木くんにはわからないよって，森安くんに言ったんだけどね」と慰めてくださった。その文章は古代教会スラブ語の研究書の一部だったのである。数名が博士課程を受験したのだが，どういう風の吹き回しか，私は成績一位で進学してしまった（成績のことは先生からこっそり教えていただいた）。

フランス語といえば，周知の通り，川端先生はロシア語以上にフランス語がおできになった。大修館からスタンダード・フランス語講座 5「手紙と商業文」を出版されているが，先生は若い頃にフランスに長期間留学され，途中で奨学金がストップしてしまったため，パリで働いておられたのである。それで私に多少の親近感を持って下さったようだ。私は中学の時からアテネフランセに通っていて，多少はフランス語ができたのである。博士課程に入った頃には英語の翻訳家としても仕事を始めていたので，ずっと後年になるが，先生がせりか書房から『ミハイール・バフチーンの世界』の翻訳を依頼されたときには，私を共訳者にして下さった（周知の通り，せりか書房は，先生を一躍有名にしたバフチンの

ラブレー論の版元である）。全体の 95%くらいは私の訳だが，途中，難しくてどうしても私には訳せないところが 10 ページほどあって，その部分は先生が難なく訳して下さった。

翻訳といえば，法政大学出版局から出版されているトドロフの『ミハイル・バフチン 対話の原理』（大谷尚文訳）は最初，川端先生が翻訳を依頼され，私が下訳をすることになっていた。だが私がさぼり続けた結果，出版局と喧嘩別れになってしまった。結果的にこの本を訳された方は仏文学者なので，バフチンの仏語訳のみをもとにして訳されたにちがいないが，こちらはなまじロシア語を知っているものだから，仏訳とのニュアンスの違いなどの細部に囚われ，どうしても仕事が捗らなかったのである。ここに懺悔するしだい（余談ながら，まだ出版局と喧嘩別れする前，来日したトドロフと食事する機会があった。そのときは私もまだやる気満々だったのだ）。

さて，大勢の先輩後輩の記憶に刻まれていると思うが，ある時期，毎年のように正月には先生が教え子たちをお宅に（厳密にいうと，お宅の隣の旧川端康成邸に）招いて下さった。先生の手料理に舌鼓を打ったものである。これは先生が東大を退官された後に始まったのかもしれない。

1982 年に，博士課程に在籍中だった私は結婚したが，先生が媒酌人（仲人）を引き受けて下さった。先生の「仲人挨拶」が通常よりずっと長く詳しかったことが記憶に残っている。その前後，式の相談や親を連れてのご挨拶などで，何度か先生のお宅にお邪魔したが，その後，私も鎌倉に住むことになり，それ以来，先生のお宅を訪ねたり，駅前でばったり会ったり，ということが頻繁にあった。あるとき，駅前を歩いていたら，先生が銀行から出てこられて，私の顔を見るといきなり，例のぼやきが始まった。「スウェーデンから川端康成の印税が振り込まれたんだが，なんと金額が 5000 円で，手数料を払って日本円に変えるのに 8000 円かかるんだってさ。どうしたら良いんですかと行員に聞いたら，放棄なさるのがよろしいかと，だってさ」

最近も，何度か用事で長谷に行くことがあり，先生のお宅のそばを通るたびに，「先生はお元気かなあ」と思っていたのだが，そんな矢先，沼野くんから先生の訃報が届いたのだった。